

ツバメと私

橋本  
茉里

あらすじ

鳥の写真撮影が趣味の高校生物教師・西館ナギ（32）は、故郷の潮彩町にある高校へと赴任。実家ではなく海近いマンションへ引っ越すと、そこで、ツバメが巣作りを始めるのを発見する。

そのマンションの目の前には、坂下水産加工工場があり、その娘、坂下彩里（18）は、丁度同じツバメを見て絵を描いていた。

その日の夜、ナギは母・西館ミドリ（60）に呼び出され、久しぶりに実家で夕食を共にするも、結婚を催促する話ばかりで辟易する。

学校が始まり、ナギは彩里のクラスの副担任となり、偶然、彼女の鳥の絵を見て感動。

ある日、ナギは課外授業の引率をする事になる。そこで、かつて自分にカメラを教えたくれた初恋の相手、水島大輔（30）と再会し、食事の約束をする。

久々のデートに浮かれるナギ。そして、食事をした晩、2人は体の関係を持ってしまう。

水島と男女の関係になったナギは、毎日心浮きだっていたが、事あるごとに、ナギのカメラを借りていく水島に、不安を覚える様になつていく。

同じ頃、彩里にも異変が起きていた。

ナギの従姉・赤堀杏（18）が母親の再婚に伴い、ナギの実家に預けられる事となる。

彩里のクラスに転校してきた杏は、彩里とすぐに仲良くなる。

家庭訪問で彩里の家の担当となったナギだが、そこで彩里が家の事情で結婚を強いられている事を聞かされる。

時を同じくして、水島が借金を背負い、姿を消した事が発覚する。

ナギは、彩里に本当の想いを聞き、なんとか両親を説得しようと思意する。

しかし、夏休みに入ると、彩里の両親は、結納を強行しようとする。

杏と一緒にナギの元へと逃げてきた彩里を、ナギは祖父母の実家へと連れて行き、自分の

事を話してきかせる。

冬を迎え、ナギは彩里の進路調査を見ると、そこには美術大学と書かれており、ナギは一抹の不安を感じる。

いよいよ、受験日前日。ナギが家で過ごしていると、外で彩里と両親が言い争っているのに気が付く。彩里は、両親に黙って受験をしようとしていた。

一旦、彩里を家へと戻したナギは、翌朝、彩里の父親に黙って彩里を車で空港まで送り届ける。

数年後、彩里は結婚し画家となっていた。

そして、その単独個展には、ナギの写真も飾られ、ツバメと女性の姿を描いた『ツバメと私』というタイトルの絵画と写真が飾られていた。

登場人物

西館ナギ（2 1）（3 2）（4 3） 高校教師

坂下彩里<sup>あいらり</sup>（1 8）（2 9） ナギの生徒

水島大輔（1 9）（3 0） フリーの写真家

赤堀 杏（1 8） ナギの従妹・彩里の同級生

西館洋輔（6 3） ナギの父親

西館ミドリ（6 0） ナギの母親

坂下哲也（5 0） 彩里の父親

坂下美穂（4 5） 彩里の母親

長谷川愛子（3 1） ナギの友人

林田 勉<sup>つとむ</sup>（4 5） 彩里の担任教師

齋藤富一（8 4） ナギの祖父

齋藤明子（8 5） ナギの祖母

坂下ユメ（5） 彩里の娘

引っ越し作業員

男子生徒 1・2・3・4

女子生徒 1・2

3年2組生徒 数名

田中ナミ（2 6） ナギの妹 写真のみ

田中ユイ（3） ナギの姪 写真のみ

○農村・全景（早朝）

夜明け前の薄暗い山間の農村。田園が広がる。

太陽が昇り、田園を照らし出す。

○齋藤家・外観（早朝）

田園に囲まれた日本家屋。朝日に照らされ桜の蕾が開き、その周りをツバメが2羽、飛んでいる。

○同・ナギの部屋・中（朝）

カーテンが閉められた部屋。

壁際に段ボールが積まれている。

床には一眼レフカメラ、『高校生物』の教科書、『高等学校学習指導要領』の本、ノートパソコンや殴り書きのメモが書かれた付箋。壁には数種類の鳥の写真が沢山飾られている。その中でも、ツバメの写真が多い。

蒲団の中で寝ている西館ナギ（32）。

と、窓の外からツバメの鳴き声が聞こえてくる。

ナギ、薄らと目を開け、寝ぼけた顔で起き上がる。

ナギ「ん？」

○同・ベランダ（朝）

ツバメの雛の鳴き声。

ナギ、窓を開けてベランダに出てくると、ツバメが飛んでくる。

ナギ、見上げると屋根の下にツバメの巣がある。

ナギ、はっとした顔をして、部屋へと慌てて戻る。

○同・ナギの部屋（朝）

ナギ、床に置かれた一眼レフを取る。

○同・ベランダ（朝）

ナギ、一眼レフを手に慌てて戻ってく

る。

カメラを構えてツバメの写真撮る。

○（フラッシュ）写真

ツバメの親鳥が雛に餌を与える。

× × ×

5羽の雛鳥達が大きく口を開けている。

× × ×

親鳥が飛び立っていく。

○ 齋藤家・ベランダ（朝）

ナギ、一心にシャッターを切る。

富一の声「おい、朝がら何やってんだ？」

ナギ、下を見る。

庭で水撒き作業の途中で上を見上げて

いる齋藤富一（84）。

ナギ「おじいちゃん！ 雛が！」

富一「おお、そうが！ やつどが！」

と、齋藤明子（85）が庭に来る。

明子「あんた、何やってんの！」

富一「ほら、雛が孵ったと」

明子、上を見上げる。

明子「ナギ、まだ、そんな恰好で！」

ナギ「だって、やっと生まれたのよ！」

明子「今日、午後には引越しのトラック来るんでしょ！？ 準備できたの！？」

ナギ「あっ、そうだった！」

と、慌てて部屋へと戻っていく。

○同・ナギの部屋（朝）

ナギ、慌てて一眼レフを置く。

ナギ「あー、どうしょ。全然、片ついてない！」

と、部屋を慌てて片づけ始める。

開けっ放しのベランダの外では、青空にツバメの親鳥が飛んでいく。

○同・外

家の前に引越したトラックと軽自動車。作業員がトラックの扉を閉める。

それを後ろで見ているナギ、富一、明

子。

引越し作業員「それでは、先に向かいます」  
ナギ「はい、宜しくお願いします」

と、頭を下げる。

作業員、トラックに乗り出発していく。

トラックを見送る、ナギ、富一、明子。

ナギ「じゃあ、行くね」

富一「気を付けでな」

ナギ「大丈夫。3年間ありがとうね」

明子「お母さんにも宜しく」

ナギ「うん」

明子「でも、よがったの？　せつかく、実家

がある街に戻るのに。わざわざ部屋なんか

借りなくても」

ナギ「いいの。仕事で生活不規則になるし」

明子「でもねえ」

富一「いいじゃねえが。立派に先生やってん

だ！　次の学校でも頑張るんだぞ！」

ナギ「うん、ありがとう。じゃあ！」

と、手を振り軽自動車に乗り出発する。

○ナギの車・中

バックミラーに家の前で手を振る富一と明子の姿。

運転するナギ、それを見て微笑む。

ふと、窓の外に目を向ける。

窓の外は、田園風景。その中を、ツバメたちが飛んでいる。

ナギ「(眩き) バイバイ」

と、小さく微笑んで前を見る。

○農村・全景

田園の中にある道を、ナギの軽自動車が走って行く。

その先には、山向こうに海沿いの街が広がっている。

○タイトル「ツバメと私」

○潮彩町・全景

海沿いに広がる港町。

○同・港

漁船が沢山停泊している。

○坂下水産加工工場・外観

海に程近い工場。入口に『坂下水産加工工場』の錆びた看板。隣には2階建ての建物が繋がっている。隣の建物の2階の窓が開いている。と、その建物の目の前にある、マンシヨン『シーサイド潮彩』に引っ越しトラックが停まる。

○坂下家・彩里の部屋

部屋の中で、デッサンをしている坂下

彩里（18）。

手元のデッサンは、鳥の絵。

彩里、真剣な顔で絵を描いている。

と、外が騒がしいのに気が付く。

ナギの声「じゃあ、宜しくお願ひします！」

彩里、デッサンの手を止め、窓の方を

見る。

彩里「……」

と、デッサンを置いて立ち上がる。

○シーサイド潮彩・入口

4階建てのマンション。

玄関前で、引っ越しトラックから荷物が運ばれている。

ナギ、傍にいて一緒に手伝っている。

引越し作業員「これは、どこにしますか？」

ナギ「ああ、それはリビングに。それは、部

屋の方をお願いします！」

引越し作業員「わかりました」

と、ダンボール箱を中へと運んでいく。

その様子を、向かいの部屋の窓から見ている彩里。

○坂下家・彩里の部屋

窓から引っ越しの様子をじっと見ている彩里。

彩里「……」

美穂の声「彩ちゃん！ ご飯よ！」

彩里「(はっとして) はい！」

と、その場を離れる。

窓の外、真向いのシーサイド潮彩の部屋のベランダの窓が開き、ナギが顔を出す。

○シーサイド潮彩・ナギの部屋

引越し作業員達が荷物を運び入れている。

ナギ、ベランダに立って外を見る。

坂下水産加工工場の向こうには海。

ナギ「うーん……やっぱ、海風いいわ」

と、窓の外を2羽のツバメが飛ぶ。

ナギ「(嬉しそうに) あれ」

と、慌てて手荷物を漁り、一眼レフカメラを取り出す。

ナギ、窓の外の写真を撮影し、映像を確認する。

ナギ「うん……いい感じ」

と、スマホの電話の着信音。

ナギ、スマホを取り出して画面を見る。

画面には、「母」からの着信。

ナギ「……」

と、ため息をつく。

#### ○西館家・外観（夜）

住宅街にある1軒家。家の前にナギの

軽自動車が停まっている。

表札には『西館』。

#### ○同・リビング（夜）

テーブルには夕飯。テレビを見ながら

晩酌する西館洋輔（63）、その横に西

館ミドリ（60）、その正面にナギが座

り食事をしている。

ミドリ「でも、本当によかったわ。地元の学

校に転勤になって。教育委員会にお礼言わ

なくちゃね」

ナギ「ちよっと、やめてよ」

ミドリ「でも3年よ？ 三十路の女を3年も

田舎の学校に行かせるなんて！」

ナギ「だから言ったでしょ。新人の教師ほど、

地方の学校に赴任するのは、当たり前なの」

ミドリ「別に都会の学校でもいいじゃない。

本当、お役所仕事よね。お父さん」

西館「……仕事できるならいいだろ」

と、テレビを見たまま、晩酌。

ナギ「とにかく、私、仕事に集中するから、

部屋には来ないでよね」

ミドリ「(若干遮って)あ、そうそう！ ねえ、

聞いてよ！」

ナギ「……」

ミドリ「この前、ナミにね。ユイちゃんの面

倒、私が見るわよって言ったら、向こうの

お義母さんが見てくれるからいいって、そ

ういうのよ！ せっかく気を使ったのに」

ナギ「いいじゃない。負担が減って」

と、チラリと横の棚を見る。

棚には、田中ナミ（26）と田中ユイ

（3）の写真が沢山飾ってる。

ナギ「……」

ミドリ「でも、ユイちゃんも私の孫なのよ？」

ナギ「あちらの孫でもあるでしょ」

ミドリ「でも、普通、母方のおばあちゃんが

みるもんじゃない？ ねえ、お父さん！」

西館「（呆れた様に）さあなあ」

ミドリ「もう！ 少し位、自分の孫に興味持

つたらどうなの！ とられちゃうわよ！」

ナギ「いや、とられるとかそんな物みたいに」

ミドリ「あの、お義母さんならやりそうなの！

もう、ナギが早く子供産まないからよ！」

ナギ「それは、関係ないでしょ」

ミドリ「関係あるわよ！ 本当、うちはどう

して極端なのかしら。妹はできちゃった婚

だし。姉は、30過ぎてても、未だに男性経

験もないなんて」

ナギ「ちよっとっ！」

西館「おい、それ位にしないか」

ミドリ「本当、死ぬ前に孫抱かせてちょうだいよ！（とテレビに視線がいき）あら、この人、この前ドラマで見た人だわ！」

と、テレビに視線を向ける。

ナギ「……」

と、疲れた様に小さくため息をもらし、顔を上げると西館と視線が合う。

西館「（ロパクで）気にするな」

ナギ「（ロパクで）ありがとう」

と、西館とナギ、食事を続ける。

#### ○潮彩高校・外観

住宅街にある新緑に囲まれた校舎。門に、『市立潮彩高等学校』の文字。

#### ○同・生物室・外

扉の上に『生物室』と書かれた教室札。

#### ○同・生物室・中

黒板の前に、白衣を着たナギが授業を

している。

ナギ、黒板に、『受精卵の卵割』と板書。

ナギ「卵割とは、受精卵の体細胞分裂の事です。では、なぜ、受精卵だけ違う言い方をするのか、それはっ」

男子生徒1の声「ふざけるように」エツチしてできる細胞だからです！」

男子生徒2の声「面白がる様に」おいちよつと、やめろって！」

ナギ、話すのをやめ、後ろの方を見る。  
クスクスと笑っている生徒達の中、後ろの席に座る男子生徒達がふざけ合っている。

ナギ「…確かに。受精卵は雌雄の交尾によって発生し、生命が誕生する細胞ですね」

男子生徒1「やっべ、交尾だって！」

男子生徒2「先生が、授業中にやらしい事いってんぞー」

ナギ「(淡々と)つまり、ここにいる全員が、その受精卵だったって事です。私も、君た

ちもね。これ、やらしい事かな？」

と、笑顔を浮かべる。

男子生徒達、ナギの視線に気がつき、

笑いが収まる。

静まり緊張する生徒達。

ナギ、生徒全員に笑いかける。

ナギ「受精卵は、他の細胞と違うから、体細胞分裂も、通常とは異なった特徴があります。と、言う事で今から特徴書き出すよー。

テストに出すからねー」

と、黒板に書き始める。

生徒達、慌ててノートに写し始める。

× × ×

チャイムが鳴る。

ナギ「はい、今日はここまで！ 次回は、小

テストするからね！」

生徒達、教室を出ていく。

ナギ、黒板を消していく。

ナギ「次は、何組だったかな」

と、教材を手にとり、生物室を出る。

○同・生物室・外

ナギ、教室から出てくる。

と、廊下を走ってきた彩里とぶつかる。

ナギ「つと」

彩里「あっ！」

と、彩里の手から画材や鳥のデッサン

画が落ちる。

彩里「す、すみません！」

ナギ「ああ、ごめんね」

ナギと彩里、同時にしゃがんで落ちた

画材やデッサン画を拾う。

ナギ「ダメよ、廊下を走っちゃ」

彩里「はい、ごめんなさい……（顔を上げて

ナギの顔を見て）あっ」

ナギ「ん？」

と、互いに立ち上がる。

彩里「……」

ナギ「はい、これで全部？」

彩里「あ、はい。ありがとうございます」

ナギ「上手ね」

彩里「え？」

ナギ「その絵、あなたが書いたの？」

彩里「あっ……はい」

ナギ「全部、鳥の絵ね」

彩里「はい。好きなんです」

ナギ「へえ、私も鳥が好きでよく写真とって

るのよ！ ええと、3年2組の……」

彩里「坂下彩里です」

ナギ「坂下さん！ ごめんね、まだ来たばっ

かりで名前覚えてなくて」

彩里「あっ、いえ」

と、チャイムが鳴る。

ナギ「じゃあ、授業に遅れないようにね」

と、慌てて廊下を歩いていく。

彩里、ナギの後ろ姿を見つめる。

○シーサイド潮彩・外観（夜）

○同・ナギの部屋（夜）

壁際の棚に写真と、沢山の一眼レフカ

メラが並ぶ。

部屋のテーブルには、オシヤレな惣菜やお菓子。それを食べながら話しているナギと長谷川愛子（31）。

愛子「（爆笑して）今どき、そんな事言っつて先生からかう生徒いるんだ」

ナギ「あの年代の男の子って、そんなもんなんでしょうね」

愛子「ふふ、絶対にその子達、童貞だわ」

ナギ「愛子」

愛子「ごめんごめん」

ナギ「あ、それでね。その授業の後に、廊下で走ってきた女子生徒とぶつかったんだけど」

愛子「なにそれ、食パン啜えて？」

ナギ「啜えてない。その子が落とした絵が、本当に上手で。まるで、写真みたい鳥の絵だったのよ」

愛子「へえ」

ナギ「ああいう、才能がある子がいると。俄

然、応援したくなるわよね」

愛子「ふーん。なんか、すっかり教師になっちゃたわね」

ナギ「ええ？」

愛子「うん。仕事に生きてるって感じ？ 学生の時から、男っ気は全くなさそうだし」

ナギ「否定できない」

愛子「まあ、その方が今はいいのかも」

ナギ「ん？」

愛子「この前さ。合コンに来た男達が全然奢ろうともしないわけ。ありえなくない？

皆、30過ぎなのよ？」

ナギ「いや、今は普通なんじゃないの？」

愛子「そうだけどさあ、パフォーマンス的に？

俺達が多く出しますよって、普通言わない？」

ナギ「まあ、明らかに自分より収入少なかったら、言うかもしれないけど。相手も自分と同じくらい働いてそうなら、いいと思っただんでしょ」

愛子「でも、奢ってくれるかどうかで本気度が分かるってもんよ」

ナギ「30過ぎた女が贅沢言ってられないんじゃない？」

愛子「それ、言わないで！」

ナギ「ねえ、愛子ってなんで、そんなに結婚したいの？」

愛子「なによ。藪から棒に」

ナギ「いや、なんとなく？」

愛子「そりゃあ、幸せになりたいからだけど。

何？ 何かあった？」

ナギ「いや……久しぶりに実家に行ったらさ。

孫見せろって、お母さんに言われて」

愛子「ああ、それ、私も言われる。孫の前に

結婚でしようがって思うけど。でも、私、

子供は欲しくないんだよね」

ナギ「え、そうなの？」

愛子「だって、育てる自信ないし。仕事も不安定だけど続けたいしさ。ま、子供云々よ  
り、先に彼氏でしょ！ どうせ結婚するな

ら好きな人がいいわあ」

ナギ「好きな人か」

と、壁に飾られた写真を見つめる。

ナギ「……」

愛子「まだ、忘れられない？」

ナギ「何のこと？」

愛子「またまた」

ナギ「……さて、次はワイン飲もうかな」

と、立ち上がる。

愛子「あつ、私も！」

ナギ「はいはい」

と、キッチンへと向かい、冷蔵庫を開ける。

ナギ「……」

○潮彩高校・職員室・中

ナギ、自席でテストの採点をしている。

デスクの上には、ツバメの写真が飾られている。

林田の声「西館先生」

ナギ、後ろを振り向く。

後ろには、林田勉（45）が立っている。

ナギ「林田先生、どうされました？」

林田「2年生の課外授業の件は、もうご存じでしたか？」

ナギ「はい。地元にいる、いろんな職業の方達にインタビューするんですよね」

林田「ええ、それで。学年担当者だけだと人数がとても足りないのです、もしよかったら、西館先生にも手伝ってほしいと」

ナギ「はい。わかりました」

林田「助かります。では、これ資料です。引率先はあとで、担当の先生から連絡がありますから」

と、書類を渡して立ち去る。

ナギ、貰った書類に目を通す。

ナギ「へえ、意外な職業があるものね……え」と、書類を凝視。

書類には、『写真家・水島大輔』の文字。

ナギ「(眩き)なんで」

○シーサイド潮彩・ナギの部屋(夜)

寝間着姿のナギ、パソコン作業をしながら、スピーカーにしたスマホをテーブルに置き電話をしている。

愛子の声「はあ!? 再会した!?」

ナギ「愛子、ちよつと声でかい」

愛子の声「あ、ごめん」

ナギ「ちなみに、再会したんじゃない。再会しそうって話」

愛子の声「すごい偶然じゃない! カメラ教えてくれた運命の人でしょ?」

ナギ「いや、そんな運命とかじゃ」

愛子の声「しかも、相手は今や世界をウロウロしてるような人」

ナギ「ウロウロって、世界中股にかけてるって言いなさいよ」

愛子の声「どっちだっていいわよ! きつとこれは、神様がくれたチャンス!」

ナギ「いや、そんな訳」

愛子の声「よし！ 飲みに誘え！」

ナギ「えっ、いやいや、愛子さん。生徒の引

率で行くのに、それはちよつと」

愛子の声「じゃあ、とにかく連絡先を入手し

なさい！」

ナギ「いや……でも」

愛子の声「これが、最後のチャンスかもしれないよ！？」

ナギ「最後？」

愛子の声「いい？ 絶対に連絡先ゲットすん

のよ！」

ナギ「連絡先ねえ……」

と、壁の写真に目を向ける。

○（回想）居酒屋『ツルカメ』・外観（夜）

『居酒屋ツルカメ』の看板。

扉には『本日貸切』の張り紙。

T…11年前

○（回想）同・中（夜）

賑やかな飲み会。壁に『写真同好会・  
新入生歓迎会！』の垂れ幕。

大学生達がお酒を飲み、あちこちで騒  
いでいる。

西館ナギ（21）、一番端の席で一人、  
詰まらなそうに携帯電話を見ている。  
画面には、ツバメの写真。

ナギ「……」

水島の声「お、けっこう上手じゃん」

ナギ「！？」

と、顔を上げると、水島大輔（19）  
が、グラスを片手に隣に座ってくる。  
ナギ、慌てて携帯電話を隠す。

水島「あっ、もうちよつと見せてよ」

ナギ「あの、えつと」

水島「ねえ、他にも撮ってたりする？」

ナギ「え？」

水島「俺、鳥好きだからさ。よく、モチーフ  
にするんだよね。君もでしょ？」

ナギ「私は……特に鳥が好きって訳じゃ。ただ、可愛いなって思っ、撮ってただけで」  
水島「そうなの？ でも写真マジ上手いよ。」  
鳥って、撮影するの結構難しいのに。でも、  
なんで携帯？」

ナギ「これ、しかないから」

水島「写真同好会なの？」

ナギ「私、今日、友達に連れて来られただけで……同好会の人じゃないの」

水島「ああ！ だから、見たことなかったのか。でも写真撮るの結構好きでしょ」

ナギ「えっ、あつ……まあ」

水島「なら今度、一緒に撮りに行かない？」

ナギ「え？」

水島「俺の古い一眼レフ貸すからさ、一緒に  
行こうよ！ ね？」

と、ナギの手から携帯電話を奪い取って操作する。

ナギ「え！ あ、あのっ」

水島「俺のメアド入れとくからさ……来週の

日曜日って大丈夫？」

ナギ「え、あつ……はい」

水島「じゃあ、決まり！ えーつと、名前は」

ナギ「あ、西館ナギ。理学部の3年」

水島「え、先輩！？ あ、俺、1年の水島大

輔です。すみません、馴れ馴れしくて」

ナギ「ううん、全然……そのままが良いよ」

水島「え、マジっすか？ じゃあ、ナギさん

で。俺の事は大輔でいいよ」

ナギ「あつ、うん」

水島「当日、チョー楽しみにしてます！ ナ

ギさん」

と、ナギに向かって笑う。

ナギ、大輔の顔に見惚れる。

ナギ「……」

○元のシーサイド潮彩・ナギの部屋（夜）

ナギの手には、古い一眼レフカメラ。

ナギ「……」

と、溜息をつき後ろに寝転ぶ。

ナギ「今更なあ」

○同・ベランダ・外（夜）

カーテンの隙間から、ナギが床に寝ている様子が見える。

ベランダの窓と屋根の間に、ツバメの巣が出来上がっている。

○アトリエ「水島」・外観

古い小さなビル。入口には『写真アトリエ・水島』の看板。

○同・中

部屋には沢山の写真と、賞状が飾られている。

部屋の中央にある応接セットで、水島大輔（30）が、生徒達に囲まれインタビューを受けている。

男子生徒3「では、写真家になったきっかけを教えてください」

水島「きっかけは、小さい頃、父親から貰ったカメラかな。遊び半分で撮影した写真がすごい褒められてね。それが、いつしか仕事になってたって感じかな」

男子生徒4「プロの写真家にはどうやってなつたんですか？」

水島「写真のコンテストに応募する事から始めたかな。そこで、賞を取って偉い人達からお仕事貰うようになるんだ」

ナギ、壁際に立って様子を見ている。

ナギ「……」

生徒達、興味深々に水島に質問する。

女子生徒1「やっぱり、女性にもてますか？」

ナギ「こらっ、ちゃんと質問」

水島「大丈夫ですよ」

と、ナギに笑顔を向ける。

少し、動揺するナギ。

水島「この仕事は、けっこう汚れる仕事多いから、そんなにモテないよ。日本にいる事も少ないし」

女子生徒2 「じゃあ、今は、彼女いないんですか？」

水島 「そうだね。今はいないよ。彼女募集中」

と、ちらりとナギを見て微笑む。

ナギ、視線に動揺する。

× × ×

入口で生徒達と水島が挨拶をしている。

ナギ、生徒達の後ろに立っている。

生徒一同 「ありがとうございます！」

水島 「こちらこそ、また遊びに来てね」

ナギ 「それでは、学校に戻りましょう」

生徒達、アトリエを先に出ていく。

ナギ、緊張した様子で水島を見る。

ナギ 「それでは、本日はありがとうございます  
しました。後日、改めてご挨拶に」

水島 「ナギさん、だよね？」

ナギ 「……気づいてた？」

水島 「そりゃあね。マジ驚いた」

ナギ 「久しぶり」

水島 「ナギさんが大学卒業して以来か……い

や、すっかり大人の女性になってって、失  
礼か。俺も、すっかりオジさんになったし」  
ナギ「いや、そんな事は」

水島「でも、驚いた。まさか、ナギさんが近  
所の高校の先生だったとはね」

ナギ「今年赴任してきたの。それまで隣町の  
学校で働いてて……大輔くんこそ、なんで  
この町に」

水島「ああ、今度、鳥をメインに個展開く予  
定でさ」

ナギ「個展？」

水島「そう。この地域って渡り鳥、沢山いる  
だろ？ だから、ここを拠点に去年から写  
真撮ってるんだよね。個展が成功したら、  
本も出す予定なんだ」

ナギ「へえ……すごい」

水島「ね？ 今度ゆっくり飲みにも行かな  
い？」

ナギ「え？」

水島「もう、10年以上ぶりだろ？ 久しぶ

りに話したいこともいっぱいあるし。あ、でも教師って飲みに行くの難しいかな？」

ナギ「あ、だっ、大丈夫だよ」

水島「嬉しそうに笑う。」

水島「じゃあ、今週末は？」

ナギ「うん」

水島「お店は俺の方で決めていい？」

ナギ「うん、良いよ」

水島「了解。じゃ、決まったら、また連絡するね。今の連絡先って」

ナギ「あ、前と同じ」

水島「そっか。じゃあ、俺からメール送ってくわ。楽しみにしてる」

ナギ「うん！」

○同・外

出てきたナギ、顔が嬉しそうにやけている。

外で待っている生徒達。ナギの様子に不審そうな顔をする。

男子生徒1「先生？ どうしたんですか？」

ナギ、慌てて顔を取り繕う。

ナギ「ああ、ごめんごめん。さ、早く学校戻ろう」

と、先に歩き出す。

顔を見合わせ、コソコソと話す生徒達。

ナギ、それに気が付かず、再び嬉しそうに顔がにやついている。

○シーサイド潮彩・ナギの部屋（夕）

鏡の前で、2着のワンピースを合わせるナギ。

ナギ「これじゃあ、若すぎ？ いや、でもこっちだと地味だし」

と、交互に手に持つワンピースを体に当てる。

ナギの周りには、洋服が散乱している。

○同・ベランダ・外（夕）

部屋の中で、ナギが洋服選びをしてい

る。

ベランダの窓の上にあるツバメの巣に、  
一匹のツバメがやってくる。  
それを出迎える、もう一匹のツバメ。  
仲良さそうに鳴き合っている。

○ 繁華街・全景（夜）

○ レストラン・外観（夜）

お洒落な外観のレストラン。

○ 同・店内（夜）

落ち着いた店内。ジャズが流れている。  
ワンピース姿のナギと水島が向かい合  
って座っている。

テーブルにはワインボトル。

水島、ワインをグラスに注いでいる。

水島「えっ、あの一眼レフまだ使ってるの？」  
ナギ「うん。一番最初のカメラだし」

水島「マジか！ ならもつといい物あげれば

よかったな」

ナギ「あのカメラも、もう手に馴染んでて。

他のカメラも買ってはみたんだけど、結局、

それが一番いいっていうか」

水島「そっか、そんなに気に入ってもらえた

なら、良かったよ」

と、ワインを飲む。

ナギ、水島のワインを飲む姿を食い入

るように見つめる。

ナギ「……」

水島「そういえば。ナギさんって、学校で何

教えてるの？」

ナギ「えっ、ああ、生物」

水島「生物！　そういえば、大学生の時もず

っと動物の写真撮ってたよね」

ナギ「うん、特に鳥が好きで」

水島「じゃあ、ずっと？　なら、俺より経歴

長いかも。ね、上手く撮るコツとかある？」

ナギ「いやいや！　プロに教えるとか」

水島「いいじゃん！　あっ、なんなら今度、

一緒に撮影しに行こうよ」

ナギ「撮影？」

水島「そう、いいスポットとか教えて」

ナギ「いいスポットか……だったら、港近くとか？」

水島「港の近くか。あ、ワインなくなっちゃったね。もう1本いい？」

ナギ「え？ うん」

水島「すみません」

ウェイターが近づいてくる。

水島「同じのをもう1本（ナギに向かって）で、港の近くって？」

ナギ「あ、漁港から少し離れた所なんだけど」

ナギと水島、楽しく会話をする。

水島、ウェイターが持ってきたワインを、ナギの空いたグラスに注いでいく。

ナギ、遠慮しつつもワインを飲む。

× × ×

テーブルには、空いたワインボトルが数本ある。

ナギ、少し赤い顔で酔っている。赤ワインが入ったグラスを飲み干して、テーブルに置く。

水島、間を開けず、グラスにワインを注ごうとする。

ナギ「あ、もう」

水島「まだまだ入ってるし……まあ、もったいないから飲もうよ」

ナギ「でも」

水島「俺だけじゃ飲みきれないからさ」

ナギ「……じゃあ」

水島、笑みを浮かべてナギのグラスにワインを注ぐ。

○坂下家・彩里の部屋（夜）

鳥の絵のデッサンを書いている彩里。デッサンを書いているのは、消しゴムで消している。

と、窓の外から、車が止まる音と男女の声が聞こえる。

彩里、ふと顔を上げて窓に近づき、カーテンを上げる。

シーサイド潮彩の入り口前に、タクシーが停まっている。

○シーサイド潮彩・外（夜）

入口前にタクシーが止まり、水島に支えられてナギが降りてくる。

水島「ほらナギさん、着いたよ」

ナギ「ごめん…ええ、ここどこ？」

水島「ナギさんの家だよ。ほら、つかまって」

と、水島に抱えられながら、シーサイド潮彩に入っていく。

○坂下家・彩里の部屋（夜）

彩里、驚いた様子でナギが水島と共にシーサイド潮彩に入っていくのを見ている。

彩里「…」

と、勢いよくカーテンを閉める。

○シーサイド潮彩・ナギの部屋（夜）

電気がつけられ、ナギ、水島に支えられながら入ってくる。

水島、ナギをソファーに寝かせる。

ナギ「本当、ごめん」

水島「いいよ。お水飲む？」

ナギ「うん」

水島、キッチンへと行きカップを取って水を注いで持ってくる。

水島「はい、どうぞ」

ナギ「ありがとう」

と、起き上がってカップを受け取る。

ナギ、ワンピースが乱れて足が見えている。

水島、じっとナギの姿を見てから、視線を逸らす。

と、写真や数台の一眼レフカメラが置かれた棚を見る。

水島「へえ……すごいな」

ナギ、水島の視線に気が付いて

ナギ「それ、大輔くんからもらった一眼レフで撮ったの……また、褒められたくて」

水島「褒められたくって？」

と、ナギの方を見る。

ナギ、潤んだ瞳で水島を見つめている。

ナギの白い足、腕、うなじ。

水島、唾を飲み込み、そっと身じろぎ。

ナギ「うん……あの、お水ありがと」

水島、ナギに顔を近づけ唇を重ねる。

ナギ「んっ」

と、目を見開き、そのまま水島に押し倒される。

キスを続ける水島。

ナギ「大輔、くん？」

水島「いい？」

と、ナギの開けたワンピースを脱がせていく。

ナギ「……（小さく頷く）」

ナギ、恥ずかしそうにするも、水島に抱き着く。

× × ×

ナギの声「(鼻にかかった声)あっ…んっ…:」

ガタガタとテーブルが揺れて、コップ  
が倒れ、水がこぼれて広がっていく。

ナギの声「(声を抑えるように) ああっ」

○同・ベランダ・外(深夜)

ナギの部屋の窓の明かりが消える。

ベランダの窓の上には、ツバメの巣。

その中には、卵がある。

○坂下水産加工工場・外観

ツバメが飛んでいる。

○坂下家・彩里の部屋・中

彩里、窓の外を見ながらスケッチブック  
に写生をしている。

スケッチブックにはツバメの絵。

ナギの声「ごめん、お待たせ」

水島の声「大丈夫。時間通り」

彩里、窓の下に視線を向ける。

窓の外、シーサイド潮彩の入り口で、  
水島の車に乗り込むナギの姿。

彩里「……」

窓の外では、水島の車が出発する。

と、上空をツバメが飛んでいく。

彩里、はっとしてスケッチを再開。

真剣な表情の彩里。

と、突然ノックの音。

彩里「(作業したまま) はい」

扉が開き、坂下美穂(45)が入って  
くる。

彩里「お母さん、どうしたの？」

美穂「うん……彩ちゃん、ちよつといい？」

彩里、少し不安げに美穂を見る。

### ○潮彩高校・外観

セミが鳴き始める。

### ○同・職員室・中

ナギ、自席で作業をしている。

と、横に置いたスマホのバイブ音。

ナギ、作業の手を止め、スマホを見る。

スマホ画面には『夜、部屋に行っている？ 水島』のメッセージ画面。

ナギ、嬉しそうに笑みを浮かべて返信を打つ。

彩里の声「西館先生」

ナギ「！？」

と、慌ててスマホを隠して振り返る。

後ろには、彩里が立っている。

ナギ「坂下さん！」

彩里「今、いいですか？」

ナギ「ああ、うん。何？ どうしたの？」

彩里「あの、何か鳥の事詳しく書いてる図鑑

とか知らないかなって思ってた」

ナギ「図鑑？ あっ、絵の参考にするの？」

彩里「はい」

ナギ「それなら、図書室にいいのがあるよ。

良かったら今から一緒に行く？」

彩里「はい」

と、じっとナギを見る。

ナギ、机を片づけて立ち上がる。

彩里「あのっ」

ナギ「ん？」

彩里「……いえ、なんでもないです」

と、視線を逸らす。

ナギ、不思議そうに彩里を見る。

○同・図書室・外

扉の上に『図書室』の教室札。

○同・図書室・中

ナギ、書棚から一冊の図鑑を渡す。

ナギ「はい、これ。結構、詳しく鳥の体の特

徴とか写真も載ってるから。参考になると

思うわ」

彩里「ありがとうございます」

ナギ「そういえば、美大志望なんだってね」

彩里「……はい」

ナギ「本当、上手なものね。絶対合格すると  
思うし、頑張ってる」

彩里「ありがとうございます」

と、ぎゅつと本を抱える。

ナギ「よし、それじゃあ。私、職員室に」

彩里「先生」

ナギ「ん？ どうしたの？」

彩里「……先生って、彼氏いますか？」

ナギ「へっ？ か、彼氏！？」

彩里「先生は、その彼氏さんと結婚を考えて  
いますか？」

ナギ「え、け、結婚！？」

彩里「はい」

ナギ「嫌だ、もう。いきなり何言ってる……」

と、彩里を見て、驚く。

彩里、真剣な顔でナギを見ている。

彩里「先生は、その彼氏さんが好きだから結  
婚しますよね？ 結婚って、好きな人とす

るものですよね？」

ナギ「え、そ、そうね」

彩里「やっぱり、そうですね……」

ナギ「……坂下さん？」

彩里「いえ……すみません。失礼します」

ナギ「あつ、ちよつと！」

彩里、図書室を出ていく。

○シーサイド潮彩・ベランダ・外（夕）

ツバメが1羽飛んでくると、雛の鳴き声かけたたましく聞こえてくる。

巣の中では、ツバメの親鳥から雛が餌をもらおうと大きな口を開けて鳴いている。

○シーサイド潮彩・ナギの部屋・中（夜）

テーブルを挟んで料理を食べているナギと水島。

水島「それは、思春期特有の興味だろ？」

ナギ「そうなのかな？」

水島「その子、結婚したいほど好きな年上の彼氏とかいるんじゃない？」

ナギ「ええ！？」

水島「ほら、まだ高校生だし、親に反対されるけど、運命の人だから、結婚したいわ、とか」

ナギ「いや、でも。坂下さんってそんな感じの子じゃないんだけど」

水島「まあ、いいじゃん。そんな事よりさ。

今度は、そのカメラ貸してほしくて」

ナギ「えっ、また？」

と、棚に置いてある一眼レフカメラを見る。棚の一眼レフカメラの数が減っている。

水島「ナギさんって、ちょうど俺が持っている機種ばかり持ってるし。終わったら必ず返すから。いいでしょ？」

ナギ「うん……まあ」

水島「ありがとう、ナギさん！」

と、ナギに抱き着く。

ナギ「え、ちよっと大輔くん」

水島、ナギに甘えるように顔を摺り寄

せる。

水島「ねえ……いい？」

ナギ「え、いや。まだご飯」

水島「うん、こつちも食べたくなった」

ナギ「え、ちよつと」

水島、ナギを押し倒し、覆いかぶさる。

ナギを見つめる水島。

ナギの赤い顔。

と、テーブルの上のスマホの着信音。

ナギ、はつとしてスマホを見る。

ナギ「あの、電話が」

水島「そんなのいいよ」

ナギ「いや、もしかしたら仕事かもしれない

しっ」

と、水島をどけてスマホを取り、ベランダに出る。

水島、不機嫌そうにナギを見る。

○同・ベランダ・外（夜）

ベランダに出て、スマホを耳に当てる。

ナギ「はい、西館です」

ミドリの声「ああ、ナギ？」

ナギ「なんだ、お母さん？ どうしたの？」

ミドリの声「どうしたのって、母親が娘に電

話かけちゃダメなの？」

ナギ「いや、ダメじゃないけどさ……タイミ  
ングってものが」

と、ちらりと部屋の水島を見る。

水島、少し機嫌悪そうに煙草に火をつ  
けている。

ナギ、少し不安げな顔。

ミドリの声「え？ 何？」

ナギ「ううん、なんでもない。で、どうした  
の？」

ミドリの声「ああ、実はね、さっきお祖母ち  
ゃんから電話あつてね？」

ナギ「お祖母ちゃんから？ 何？ なにかあ  
ったの？」

ミドリの声「それがね」

ナギ、電話の会話を聞いている。

ナギ「えっ！？」

ナギの頭上にある、ツバメの巣で、雛たちが驚いて鳴き始める。

○同・3年2組教室・外（朝）

扉の上に、『3年2組』の教室札。

○同・3年2組教室・中（朝）

黒板の前には、赤堀杏（18）と林田。

座る生徒達の中には、彩里。

ナギ、教室の端に立っている。

林田「えー、今日からクラスの仲間に入ります。赤堀杏さんです」

杏「赤堀杏です！　そこにいるナギちゃんの従妹です！」

生徒達から騒めき声。

ナギ、杏を小さく睨みつける。

ナギ「杏！　学校では先生でしょ！」

杏「え、何で！？　ナギちゃんひどい！　従妹同士なのにー」

ナギ「ひどくない！」

生徒達から笑いが起きる、

林田「西館先生、落ち着いて」

ナギ「すみません」

林田「まあ、そういう事で。皆、仲良くする  
ように。じゃあ、その空いてる席に座っ  
て」

杏「はい！」

と、彩里の隣の席に行く。

杏、席に座って彩里を見る。

杏「宜しくね」

彩里「宜しく」

ナギ、心配げに杏と彩里を見る。

○同・理科準備室・外

扉に『理科準備室』の札。

○同・理科準備室・中

ナギ、荷物の整理をしている。

と、突然、扉が開き、杏と彩里が来る。

杏「ナーギちゃん！」

ナギ「杏！ 入る時はノックでしょ。それに、学校では、先生！」

杏「他に誰もいないからいーじゃん。あ、それと伯母さんから今日、夕飯食べに来なさいだって」

ナギ「……今度行くからって言うておいて」

杏「じゃあ、お小遣いくれる？」

と、両手をナギに広げてみせる。

ナギ、諦めたように溜息。

ナギ「1度、帰ってから行くわ」

杏「えー、なんで諦めるのー」

と、ナギ、彩里に気がつく。

ナギ「坂下さん、なんかごめんね」

杏「あ、ナギちゃんひどーい！ もう、彩里

とは親友だよ！ ね、彩里？」

彩里「え、あ、うん」

ナギ「坂下さん。本当、無理しなくていいからね」

彩里「いえ、私は別に」

杏「（突然、大きな声）あー！」

と、スマホを見ている。

ナギ「何！？ また大きな声だして」

杏「彩里！ 限定パフェ、今日までだって！

早く行かないとなくなっちゃう！」

と、彩里の手を取り引っ張っていく。

彩里「え、あっ」

杏「ほら！ 早く早く！ じゃあね！ ナギ

ちゃん！」

と、彩里の腕をひっぱり、出て行く。

ナギ、呆気にとられて閉まる扉を見つ

めて、疲れた様のため息をつく。

### ○西館家・外観（夜）

家の前にナギの車。

### ○同・リビング（夜）

食卓に3人分の料理。1組は、ラップ  
がかけられている。

ナギとミドリが食事中。

ミドリ「杏ちゃん、学校は大丈夫そう？」

ナギ「うん。友達もできたみたい」

ミドリ「そう、ならよかったけど」

ナギ「叔母さん、再婚するんだって？」

ミドリ「ええ、でも、今どき、連れ子を嫌がるからって、高校卒業するまで、預かってほしいなんて、勝手すぎない？」

ナギ「まあ、ね。こんな大切な時期に転校までさせなくてもね」

ミドリ「相手にもお子さんがいるんだけど、同じ学校には通わせたくなかったみたいよ。

本当、何考えてるんだか」

ナギ「……そういえば、お父さん大丈夫？」

ミドリ「ああ、平気平気。ただの検査だし。

来週には退院だって。もう、歳なのよ」

ナギ、ミドリの白髪をじつと見つめて、目を逸らし、壁に飾られた写真を見る。

ナミとユイの写真ばかり。

ナギ「最近、ナミは？」

ミドリ「全然、連絡こないわ。あっちの親御

さんの所にはしよっちゅう行ってるのに。

本当、どこの家族も嫌になっちゃう」

ナギ「……」

ミドリ「杏ちゃんも。明るくふるまってるけど。それがかえって可哀そうだね」

○同・玄関廊下（夜）

リビングの扉の前にたたずむ、制服姿の杏。手にはコンビニのレジ袋。

ミドリの声「母親の事、忘れたくてしょうがないのよ」

杏、持ったレジ袋を握った手をギュッと力が入る。

○同・リビング（夜）

ナギとミドリ、食事を続けている。

ミドリ「そういえばナギ、今年何歳なの？」

ナギ「32だけど」

ミドリ「もう、そんな歳なの！」

ナギ「もうって、いまさら」

ミドリ「彼氏は？」

ナギ「えっ、えっとそれは」

ミドリ「いるの！？ いるのね！」

ナギ「いるというか、なんというか」

ミドリ「いい人なら、結婚しなさい！」

ナギ「はっ！？ そんな、急に」

ミドリ「昔は高齢出産だけど、今じゃ30代半ばで出産は珍しくないでしょ？」

ナギ「出産！？」

ミドリ「今がギリギリよ！ 早く決めなさい！」

ナギ「いや、あの、タイミングってものが」

杏の声「（明るい声）ただいま！」

ナギ、ミドリ、リビングに入ってきた

杏に目を向ける。

ミドリ「おかえりなさい、杏ちゃん」

ナギ「杏、ちよっと帰り遅いんじゃない？」

杏「まだ、7時じゃん。ほら、新作デザート

買ってきたよ！ 3人で食べよ！」

ミドリ「杏ちゃん、先に着替えてご飯食べな

さい」

杏「はい」

と、リビングを再び出て行く。

ナギ、少しほっとした顔をする。

○坂下家・彩里の部屋（夕）

彩里、窓を開けて、デッサンしている。

視線の先には、ナギの部屋のベランダにあるツバメの巣。

と、家の前の道路をナギの車が通り、シーサイド潮彩の駐車場に入っていく。

彩里、車に気が付く。

車から、ナギが降りて来る。

じつと見ている彩里。

彩里「……」

○シーサイド潮彩・ナギの部屋（夕）

真っ暗な部屋に入ってくるナギ。

ナギ「はあ……疲れた」

と、ベランダの窓の外に何か飛んで

いく気配。

ナギ、ふとベランダに気が付き、窓を開ける。

開けたとたん、雛たちの鳴き声。

頭上の巣では、大きくなった雛達が、大きな口を開けて、親鳥から餌をもらっている。

ナギ、呆然と巣を見上げる。

ナギ「もう、こんなに」

と、部屋の棚の方を見る。

棚には写真と、一眼レフのカメラ1台しか置かれてない。

ナギ「……そういえば、連絡来ないな」

と、部屋に戻って、鞆からスマホを取り出す。

スマホの画面には、水島のメッセージ画面。ナギから『昨日はごめん。今度いつ会えそう？』『忙しいの？』『おはよう。ごはん食べてる？』『撮影順調？連絡ください』とメッセージが続いて

いるが、水島からの返信はない。

ナギ「……忙しいんだよね」

と、スマホをテーブルの上に置き、一眼レフカメラを見る。

ナギ「……」

と、棚へと近づき、一眼レフカメラを手に取って、再びベランダの方へと行く。

ナギ、ツバメの巣を見る。

親鳥は去って、巣は静まりかえっている。

ナギ「……いちゃったか」

と、外の方に目を向け、向かいの坂下家の方を見る。

坂下家の2階の空いている窓から、彩里がこちらを見ている。

ナギ「えっ、坂下さん！？」

彩里、小さく会釈。

生徒達が休み時間で遊んでいる。

○同・理科準備室・外

扉に『理科準備室』の教室札。

ナギの声「本当、驚いたよ」

○同・理科準備室・中

ナギ、教材の準備をしており、彩里が手伝っている。

ナギ「まさか、坂下さんが向かいの工場の娘さんだったなんて。しかも、部屋真向かい」

彩里「私は……引越して来た時から気がついてはいたんですけど」

ナギ「本当！？ もう言ってよー」

彩里「……あの、先生の部屋の所にツバメの巣」

ナギ「そう！ って、あれ」

彩里「？」

ナギ「もしかして、いつも見てた？」

彩里「……」

ナギ「私が、男の人と一緒にいたのも？」

彩里「……すみません」

ナギ「ああ、そっか……え、もしかして、彼氏がどうか、結婚の話とか、それを見たから？」

彩里「……」

ナギ「……坂下さん？」

彩里「……あの、先生。私」

と、突然、扉が開き、杏がやってくる。

杏「あ！ 彩里、ここにいたー！」

彩里「杏ちゃん」

ナギ「こら、杏！ 入る時はノック！」

杏「いいじゃん、ここナギちゃんの部屋だし」

ナギ「私以外の先生も使ってるからね！」

杏「私だけ仲間外れずるいー！ 私も手伝う

よ！ 彩里、どれ持ってればいい？」

彩里「うん、じゃあこっちを」

彩里と杏、楽し気に話をする。

ナギ、彩里の様子を少し心配げに見る。

○同・職員室

教師達が集まっている。席で書類を見ているナギ。

林田、前で話している。

林田「来週から、家庭訪問が始まりますが、特に3年生担当の先生方は、毎年の事ながら、保護者のお話をよく聞いてきてください。今回は、副担の先生達にも手伝ってもらいます」

ナギ、書類を目で見ている。

書類には坂下彩里の担当に西舘ナギと書かれている。

○同・3年2組教室

騒がしい教室。彩里、プリントを真剣な顔でじつと見ている。

プリントは『家庭訪問のお知らせ』。

横にいる杏、同じくプリントを見る。

杏「うちって、家庭訪問どうなるんだろ？ ナギちゃんが、伯母さんと話すのかな？」

彩里「……」

と、プリントをぎゅつと握る。

○坂下家・玄関・外

ナギ、スーツ姿で玄関前に立つ。

玄関が開き、中から彩里が顔を出す。

ナギ「こんにちは。なんか、変な感じだね」

彩里「……」

ナギ「坂下さん？」

彩里「あつ、すみません……どうぞ」

ナギ「おじゃまします」

と、玄関を入っていく。

○同・リビング

少し雑然とした古い部屋。

テーブルには、ナギ。向かい合うよう

に、作業着姿の坂下哲也(50)、美穂、

彩里が座る。

坂下「すみません。こんな格好で」

ナギ「いえ、お仕事でお忙しいところ、あり

がとうございます」

美穂「あの、彩里は学校ではちゃんとやっていますでしょうか？」

彩里「ちよつと、お母さん」

ナギ、微笑ましそうに笑って

ナギ「彩里さんは、授業でも、よく発言してくれるので、私も助けてもらっています」

美穂「（安心した様に）そうですか」

ナギ「勉強の方も、とても優秀です。美術の先生にも聞きましたが、作品もとても素晴らしいので、美術大学への進学も問題ないとの事でした」

美穂、ちらりと坂下の様子を伺う。

坂下、難しい顔をしている。

坂下「先生」

ナギ「はい、何でしょう？」

坂下「実は……娘は進学できません」

ナギ「えっ？」

彩里「おとうっ」

と、彩里の手を美穂の手がつかむ。

美穂、彩里を見て首を横に振る。

彩里「……」

ナギ、坂下の顔を緊張した顔で見る。

ナギ「あの、でも進路希望では、美術大学を志望する伺ってますが」

坂下「その予定でしたが……無理です。実は、ここ数年うちの経営も厳しくて……正直、とても進学など」

ナギ「そうですか……ご家庭の事情でしたら、私どもも無理に進学とは進められません。……でも、まだ奨学金などの選択肢もありますし、まだ諦めるのは」

坂下「いや、進学はできません」

ナギ「……では、お父様としては、彩里さんを就職させたいというお考えで」

坂下「いえ……彩里は、結婚させようと考えています」

ナギ「けっ、結婚!？」

と、驚いて彩里を見る。

彩里と美穂、悲しげに顔を俯かせる。

ナギ「あの、ちょ、ちよつと待ってください！  
ど、どうして結婚なんて」

坂下「お恥ずかしい話、実は、銀行の融資も  
断られてまして……そんな時、昔からお世  
話になっている会社の社長から資金を援助  
してくれると申し出があったんです……た  
だ」

ナギ「ただ？」

美穂「そこのご子息をうちの跡取りにとい  
うのが条件です。それも、彩里と結婚して  
婿入りという形にしてほしいと」

ナギ「婿入り！？ そんな、江戸時代じゃあ  
るまいし。彩里さんは、まだ18歳です  
よ！？」

坂下「しかし、実際にある話なんです。だか  
ら、彩里には結婚してもらわないと」

ナギ「そんなっ！ あの、よくお考えになっ  
たんですか！？ 娘さんの一生に関わる事  
ですよ！？」

坂下「……」

美穂「……」

ナギ、彩里に目を向ける。

ナギ「彩里さんも、同じ考えなの？ 違うよ

ね！？」

彩里「……私は」

坂下「（遮るように）西館先生！」

ナギ、坂下を見る。

坂下、覚悟を決めたような顔で見ている。

坂下「彩里は、十分に分かってくれています」

ナギ「でも！」

坂下「じゃないと、家が、工場が潰れてしま  
うんです！ 生活に困る従業員も出てく

る」

ナギ「……」

坂下「そこまで、我が家は追い詰められてい  
るんです。何も知らないのに、家業の事に  
口を挟まないでいただきたい！」

美穂「わかってください、先生！ お願いし  
ます！」

と、土下座をする。

ナギ、困惑したまま坂下と美穂を見る。

彩里、こぶしをぎゅっと握り、部屋を

飛び出していく。

ナギ「彩里さん！」

○同・彩里の部屋

彩里、机に突っ伏している。

彩里「……」

と、外から扉が開く音。

ナギの声「失礼しました」

彩里、顔を上げる。

○同・玄関・外

閉まった玄関の前で、お辞儀から顔を

上げたナギ。小さくため息をついて、

シーサイド潮彩の方に歩いて行く途中、

上を見上げる。

窓が開いている彩里の部屋。

ナギ「……」

○シーサイド潮彩・ナギの部屋・中（夜）

ナギと愛子向かい合って座る。

愛子「18歳で結婚！？　なんて羨ましいー」

ナギ「ちよっと！」

愛子「ああ、ごめんごめん。でも、今どきそんな話あるんだねえ」

ナギ「私も教師になって、初めて聞いたよ」

愛子「家の為に結婚か。まるでドラマね」

ナギ「本当よ。娘を犠牲にするなんて、いつの時代よ。親としてどうなの？」

愛子「うーん、でもほら。もしかしたら、違う思いもあつたのかも」

ナギ「違う思い？」

愛子「そう。その子、美大目指してたんですよ？　そうになると、もう家には帰ってこないじゃん。もしかしたら、娘さんを側に置いときたかった、とかなんじやない？」

ナギ「そんな……彼女の人生はどうなるのよ」

愛子「どっちにしろ、娘の事、ただの所有物  
としか思っていないよね。その親」

ナギ「……」

愛子「そう言えば、彼氏とはどう？」

ナギ「えっ？」

愛子「何か、連絡取れないって言ってたじゃん。返信きたの？」

ナギ「いや、それはまだ」

愛子「はあ！？　じゃあ、全然会ってないの？」

ナギ「うん……」

愛子「ねえ、大丈夫？」

ナギ「え？」

愛子「だって、いくら個展するからって、連絡一切取れないのはヤバイでしょ。カメラも、ほとんど貸してるんでしょ？　一度、会いにいつてみたら？」

ナギ「……うん」

と、カメラがあつた棚を見る。

窓の外では、ツバメが飛んでいく。

ツバメの雛の鳴き声が聞こえる。

○潮彩高校・美術室（夕）

彩里、大きなキャンバスに向かつて一  
心に描いている。

キャンバスには、空を飛ぶツバメの絵。

ナギの声「へえ、凄い」

彩里、びくりと肩を揺らして振り返る。

後ろには、ナギの姿。

彩里「西館先生」

ナギ「もしかして、あのツバメがモデル？ 細

かいところまで、よく描けてるわ」

彩里「……コンクールに出すんです」

ナギ「へえ、絶対入賞する。間違いない」

彩里「最後にしようと思って」

ナギ「……」

彩里「……先生」

ナギ「何？」

彩里「私……美大に行きたいんです」

ナギ「……」

彩里、キャンバスに筆を走らせながら

彩里「私、ずっと画家になりたくて」

ナギ「うん」

彩里、筆を下ろす。

彩里「でも、工場が大変なのも知ってる」

ナギ「……」

彩里「婿入りなんて、今どき、馬鹿げてるな

って自分でも思うんです……でも」

と、手の筆をぎゅっと握りしめる。

ナギ、しゃがんで彩里の顔を見る。

ナギ「なら、もう一度、話してみよう」

彩里、諦めた様に笑う。

彩里「無理。きっと聞いてくれない」

ナギ「子供が本気でやりたいって言えば、親

はわかってくれるものよ」

彩里、顔を上げてナギを見る。

ナギ「もう少し、粘ってみよう」

彩里、不安そうな顔で頷く。

ナギ、ぎゅっと彩里の手を握る。

○道々アトリエ「水島」・外

私服姿で歩いているナギ。

ナギ「……」

曲がり角で一度止まり、深呼吸をする。

ナギ「(呟き)よし」

と、曲がり角を曲がってしばらく歩き、何かを見て驚いて立ち止まる。

ナギ「えっ？」

○シーサイド潮彩・外観

蝉の鳴き声。

○同・ナギの部屋・玄関

チャイムの音。

ナギ、Tシャツ短パンのだらしない姿で、玄関のドアを開けている。

ナギ「……え？」

目の前には、大きな鞆とスケッチブックを抱えた杏と申し訳なさそうな彩里。

杏「ナギちゃん！ あーけーて！」

彩里「……」

○ 同・ナギの部屋

彩里、壁の鳥の写真と棚の埃がかぶつた1台しかない一眼レフカメラを見つめる。

彩里「……」

ナギの声「結納!？」

彩里、はっと前に顔を戻す。

ナギ、麦茶を持ったまま驚いた顔。

ナギ「(呟き)私ですらした事ないのに」

杏「ナギちゃん、今、そこじゃない」

ナギ「ああ……あの、坂下さん、お父さんと

お母さんとは、お話ししたの？」

彩里「それが、今さら無理だの一点張りで。

そしたら、昨日」

○ (回想) お見合い会場

スーツ姿の坂下と着物姿の美穂の間に、困惑しているワンピース姿の彩里。

目の前には、スーツ姿の青年が笑う。

○元のシーサイド潮彩・ナギの部屋

ナギ、頭を抱える。

ナギ「まさかの強硬手段」

杏、テーブルを力強く叩く。

杏「缶詰工場の会社の息子だよ！ しかも、

次男！　せめて長男にしろっての！」

ナギ「杏も、そこじゃないでしょ！　それで、

家出してきたと」

彩里「はい……」

ナギ「で？　なんで、杏まで」

杏「彩里に行くところないって電話もらった

の！　でも、家だと絶対に伯母さん、彩里

の家に連絡しちゃうじゃん」

ナギ「だからって、ここに来られても」

杏「だって、無理やり結納だよ！？　今、帰

ったら即結婚だよ！？　ナギちゃん、先生

でしょ！　匿ってよ！」

ナギ「いや、教師だからこそできない事も」

と、彩里を見る。

彩里、すぎるような顔。

ナギ「うーん」

と、頭を抱える。

### ○道路

山沿いの道路をナギの車が走っていく。

杏、後部座席の窓から顔を出す。

杏「（叫んで）やっほー！」

ナギの声「杏！ 顔ひっこめなさい！」

彩里、じっと窓の外見ている。

と、ナギの車が走り去っていく。

### ○農村・全景

#### ○斎藤家・外

家の前にナギの車。

車から降りてきたナギ、彩里、杏。

彩里、珍しそうに家を見上げる。

彩里「……」

杏「びっくりするほど、古いでしょー」

ナギ「あんた、お祖母ちゃん家をなんだと」

と、家から明子が出てくる。

明子「あら、やっと着いたの」

杏「おばあちゃーん！」

と、明子の元へ駆け出ししていく。

明子「杏！ 元気にしてた？」

杏「うん！」

と、庭から富一が出てくる。

富一「おお杏、元気だったか？」

杏「おじいちゃん、久しぶりー」

と、富一に抱き着く。

彩里、呆然と杏の様子を見る。

彩里「……」

ナギ、荷物を車から降ろしてくる。

明子、ナギと彩里に気が付く。

明子「ナギ？ 何してるの？」

富一「スイカ冷やしてあるぞ！」

ナギ「今行く！（彩里に）さあ、行こう」

彩里「……はい」

## ○ 同・居間

杏と彩里、スイカを食べている。

一緒に富一もいる。

富一「ほら、彩里ちゃんいっぱい食べなさい」

彩里「はい……ありがとうございます」

杏「はあ、おじいちゃんのスイカうまい」

富一「そうか？ ほら、ここなんかもっと美

味いぞ」

杏「本当！ じゃあ、いただきー」

と、明子が麦茶を持ってくる。

明子「杏は、ちよつと遠慮しなさい！」

杏「えー」

彩里、周りを見回して

彩里「そういえば、先生は？」

明子「ああ、ナギだったら2階の部屋だよ」

彩里「……2階」

○同・ナギの部屋・中

ベランダの窓が開いている。

ナギ、壁に飾られた写真を眺めている。

と、そこに彩里が来て、そつとドアか

ら中をのぞく。

彩里「先生？」

ナギ「ああ、ごめんね。スイカ食べた？」

彩里「はい……」

と、写真を見る。

彩里「全部、ツバメ？」

ナギ「そう、こっちに居た時に撮ったの」

彩里「……綺麗」

壁の写真は、ツバメの写真。田んぼの上を飛ぶツバメ、巣作りをしているツバメの番、空を飛ぶツバメの姿。

彩里、引き込まれるようにじっと見る。

ナギ「ちょうど、この部屋の窓の所に巣ができてね。引越す時に雛が孵ったんだよね。

無事に巣立ったみたい」

と、ベランダの窓の外を見る。

彩里、同じように視線を向ける。

彩里「もう、写真は撮ってないんですか？」

ナギ「え？」

彩里「部屋に置いてあった一眼レフ。埃かぶ

ってたから」

ナギ、困ったように笑う。

ナギ「私ね。別に、写真を撮るのはそんなに好きじゃなかったのよ」

彩里「え？」

ナギ「写真始めたきっかけがね、大学で好きだった人に教えてもらったからで。本当、単純でしょ？」

彩里「……」

ナギ「その人とは、私が卒業して会えなくなっちゃただけど、写真はなんとなく続けててね。そうしてるうちに、楽しくなっちゃって」

彩里「……」

ナギ「で、つい最近、その人と再会できたの」

彩里「あっ……あの、彼氏さん？」

ナギ、苦笑して頷く。

ナギ「初めは楽しかったんだ。学生の頃に戻ったみたいで……でもね。だんだんと現実って違うんだなって分かって」

○（回想）アトリエ「水島」・中

薄暗い室内。部屋には荷物が一つも置いておらず、床には、沢山の督促状と、鳥の写真が1枚だけ落ちていた。

呆然と佇むナギ、床に落ちた鳥の写真を拾い上げる。

○元の斎藤家・ナギの部屋

ナギ、写真を見て悲し気に笑う。

ナギ「なんだか、写真も撮れなくなっちゃった……あんなに楽しかったのに」

彩里「……」

ナギ「ごめんね。生徒に話す事じゃなかったね」

と、彩里を見て苦笑し、ベランダの外を見る。

ナギ「あっ」

彩里「えっ？」

ナギ、ベランダに駆け寄り、外に出る。

彩里、ナギを追いかけていく。

○同・ベランダ

彩里、ベランダに出てくる。

ナギ、空を見上げている。

空には、2羽のツバメが飛んでいる。

2羽のツバメが、屋根の上にある空っ

ぽのツバメの巣へと飛んでくる。

彩里、じっとツバメを見る。

と、隣でナギが同じく見つめている。

ナギ「戻ってきたのね。写真っ」

と、部屋に戻ろうとして止まり、苦笑。

彩里、ナギを見つめている。

彩里「……撮れます」

ナギ「えっ？」

彩里「きつと、また撮れます」

ナギ、彩里を見つめて、嬉しそうに笑う。

ナギ「ありがとう」

ツバメの巣の中で、番たちが仲良く寄り添っている。

## ○公園

田園が見渡せる公園。

杏、楽しそうに辺りを散歩している。

ナギ、日傘をさして敷物の上に座り様子を見ている。

隣には彩里が、スケッチブックを手にデッサンをしている。

近くの木には小鳥がいる。

スケッチブックには、小鳥の素描。

彩里の側に、杏がやってくる。

杏「彩里！ 何書いてるのー？」

彩里「ちよ、声小さくして！」

と、小鳥が飛んでいってしまふ。

彩里「(残念そうに) ああ」

杏「あつ、ごめん！」

彩里「もう！」

杏「本当、ごめんってー」

頬を膨らます彩里に、杏が謝りながらやがて、笑いあふ。

ナギ、それを眺めて微笑む。

○坂下家・玄関・外

ナギの車が玄関前に到着し、後部座席から彩里が降りてくる。

坂下水産加工工場の方から、作業着姿の美穂、気が付いて慌ててやってくる。

美穂「彩ちゃん！」

彩里「お母さん」

美穂、彩里の傍に来る。

美穂「突然いなくなっ！ 心配したのよ」

彩里「……」

ナギ、車から降りてくる。

ナギ「こんにちは」

美穂「あっ、先生……本当に、この度はご迷惑をおかけしました」

と、頭を深々と下げる。

ナギ「いえ。私も、突然連れ出してしまっ申し訳ありません。あの、ちよっとお話よろしいですか？」

美穂「……はい」

彩里、不安げな顔。

ナギ、安心させるように頷く。

彩里「私、家に入ってるね……先生、ありがとうございました」

と、中へ入っていく。

ナギ、彩里がいなくなったのを見て

ナギ「あの、進路と結婚の事ですが。もう1度、よく話し合ってはどうかでしょうか」

美穂「それは」

ナギ「ご家庭の事情も分かります。ですが、

彩里さんには、彩里さんの人生があります。

結婚は人生を大きく左右する出来事です。

未成年の彩里さんに、それを今、背負わせるのはどうなのでしょう？ 以前もお話しましたが、お金の事なら奨学金もありますし。大学じゃなくても、専門学校や関連する職業へ就職する手もあります。なので、もう一度、よく考え直して」

美穂「(遮って) 先生、ご結婚は？」

と、俯いている。

ナギ「えっ、いえ」

美穂「お子さんも？」

ナギ「おりませんが」

美穂「なら、分からないのかもしれないかもしれませんが

……親というものは、子供が将来、苦労しないように導くのが義務なんです」

と、作業着のエプロンをぎゅっと握りしめて、ナギを見る。

ナギ、息を止め美穂を見つめる。

美穂「今どき、画家で食べていくななんて。苦労するに決まっています」

ナギ「それは、彼女の努力次第で」

美穂「私達だってわかってるんです。家の為に、娘を結婚させるなんて、非常識だって」  
ナギ「だったら」

美穂「だけど、お金がなきゃ全部台無しになるんです！ あの子が絵を描く事もできなくなってしまうでも、結婚すれば、生活は安定するし、学校に行けなくても絵を描くことはできるでしょう？」

ナギ、驚いたように美穂を見つめる。

美穂「だから、こうする事が彩里にとって一番幸せに暮らしていける、今、母親としてできる、最大限の方法なんです」

ナギ「……」

上をツバメの親鳥が飛んでいく。

○シーサイド潮彩・ナギの部屋・窓・外

ツバメの巢の雛鳥が口を開けて鳴いている。そこに親鳥がやってきて餌を与えている。

○カフェ・外観

○同・中

ナギと愛子、それぞれランチプレートを食べている。

ナギ「親の愛ってすごいね」

愛子「何、突然急に」

ナギ「いや、一見子供にひどい事してるようでも、その親なりに子供の幸せ考えてたん

だなんて思ってた」

愛子「ああ、例の生徒さん？」

ナギ「話聞いたらさ。子供いない私が、口出しちゃいけないかなって思っちゃって……でも、親の考える幸せが、子供の幸せとは限らないよなとも思ったり」

愛子「まあ、そうでしょ。親子って言っても、別の人間なわけだし」

ナギ「そう、なんだけどさ」

愛子「一昔前まではさ、女の幸せって結婚して子供を産んで育てる事でしょ？ でも、今は、女もバリバリ働いて、結婚しなくても、子供産まなくても幸せに暮らしてる人が沢山いる。私達みたいに」

ナギ「いや、私達は、ただ単に結婚できなかつただけでしょ」

愛子「それを言うな」

ナギ「すみません」

愛子「それは、置いといて。つまり、子供の人生決める権利は、親にもないだろうって

事」

ナギ「……」

愛子「子供がいるいない関係ない。ナギはその子の教師なんだし。口出しも遠慮する必要ないんじゃない？」

ナギ「……愛子」

愛子「なに？」

ナギ「ありがとう」

と、抱き着く。

愛子「ちよつと、離れなさいよ！」

ナギ「いや！」

○シーサイド潮彩・ナギの部屋（早朝）

ナギ、ツバメの鳴き声で目を覚ます。

起き上がり、カーテンを開け、窓を開ける。

晴天の空に、ツバメ達の鳴き声。

ナギ、ツバメの巣を見上げると、成長した雛達が、飛び立とうとしている。

ナギ、慌てて室内へと戻っていく。

○坂下家・彩里の部屋（朝）

彩里、ベッドで寝ている。

ふっと、目を覚まして起き上がり、寝ぼけた顔のまま窓に近づいて開ける。

窓の外、シーサイド潮彩のナギの部屋の窓から、ナギが身を乗り出して一眼レフで写真を撮っている。

彩里、目を覚ます様にナギを見つめる。

○シーサイド潮彩・ナギの部屋（朝）

ナギ、窓から身を乗り出してカメラを巣に向け、一心にシャッターを切る。

巣にいる成長した雛達が羽ばたく、周りを親鳥が心配げに飛び回っている。

1匹の雛が、巣から身を乗り出して飛んでく。

ナギ「あっ」

と、カメラを雛に向ける。

雛鳥、坂下家へと向かって飛んでいく。

ナギ、一心不乱にシャッターを切る。

ナギ「よかった」

と、坂下家の部屋の窓から、飛んでいくツバメを見ている彩里に気が付く。  
彩里、ナギに気が付く。

○坂下家・彩里の部屋（朝）

窓の外、嬉しそうにツバメの巣を指さすナギの姿。

彩里、思わず嬉しそうに頷く。

と、ふと横に置いてあるツバメの絵が描かれたキャンパスを見る。

彩里、キャンパスの傍に行き、座って描き始める。

○潮彩高校・外観

木々が紅葉している。

○同・3年2組教室

林田が、生徒達にプリントを配っている。

彩里、杏からプリントを受け取る。

プリントには『最終進路調査』の文字。

林田「すでに決まってる人もいると思います

が、これが、最終の進路調査になります。

親御さんともよく話し合って書いてくださ

い。提出は、来週までです」

杏、彩里の方に振り向く。

杏「彩里、どうするの？」

彩里、プリントをじっと見つめる。

○西館家・リビング

リビングにミドリ、ナギ、杏、西館が

向かい合って座っている。

西館「杏ちゃん、お母さんとは連絡した？」

杏「……お金は出すから勝手にしなさいって」

ミドリ「そんなんっ、まったく、あの子は」

西館「母さん」

ミドリ、不満げに息を吐きだす。

ナギ「杏はどうしたいの？ 杏の成績だった

ら大学進学もなんとかできると思うけど」

西館「進学したいなら遠慮なく言ってい

学費は、伯父さん達も援助するし」

ミドリ「あなた！ 家に、そんなお金」

西館、ミドリを睨みつける。

ミドリ、はっとして口を閉じる。

ナギ「ほら、父さんもこう言ってるし。杏、

どこか行きたい大学はないの？ 大学じゃ

なくても専門学校だって」

杏、顔を上げ笑う。

杏「私、就職する」

ナギ「杏」

杏「私、大学行ってやりたい事もないんだよ

ね。それに、専門学校もピンとこないし。

だったら、就職した方がいいかなあって」

ナギ「その、やりたい事を見つけるのも、大

学なのよ？ 何も、無理して、今就職しな

くても」

杏「でも、行ったところでき。見つからなか

ったら？」

ナギ「……それは」

杏「無駄に大学行って、適当に就職するんだ  
つたらさ。今、就職したって変わらないじ  
ゃん。それに、元々高校卒業までって約束  
で来たんだもん。早く独り立ちしないとさ」

ナギ「……」

西舘「杏ちゃん、そんな遠慮しなくても」

杏「それに、就職してからやりたい事みつか  
ったら、それからだって遅くないでしょ？  
そのために、お金貯めるし」

ナギ「杏、でもね」

ミドリ「何、甘い事言ってるの！」

ナギと杏、驚いてミドリを見る。

ナギ「ちよつと、お母さん」

ミドリ「杏ちゃん。世の中、そんなに甘いも  
のじゃないのよ？ 高卒の子の収入が、大  
卒より、どれだけ低いか分かってる？」

杏「えつと……それは」

ミドリ「今の時代、大卒の人が大半なのよ？  
そんな中、高卒なんて。人生、全然違うわ  
よ！ 結婚だって変わってくるわ！ それ

に、就職してからやりたい事見つけても、手遅れなことだってあるのよ！」

ナギ「ちょ、お母さん？」

杏「でも……伯母さん達にも迷惑かかるし」

ミドリ「子供が大人に迷惑かけて何が悪いの！ 子供は子供らしく、大人に甘えなさい！ 無理に大人にならなくていいの！」

ナギと西館、驚いて顔を見合わせる。

ミドリ「杏ちゃん、本当はどうしたいの？ 本

当は、やりたい事あるんじゃないの？」

杏「……私」

と、顔を俯かせる。

ナギ「杏」

西館「杏ちゃん」

杏「（小声でつぶやく）教師になりたい」

ナギ「えっ？ 何？」

杏「私、本当は教師になりたい。ナギちゃん  
みたいなの」

ナギ「えっ、私！？」

杏「うん。生徒一人一人の事ちゃんと見れる。」

学校の先生になりたい」

ナギ「……」

ミドリ「なら、最初からそう言いなさい」

杏「えっ」

西館「じゃあ、大学進学で決まりだな」

杏「でも、お金ないし」

西館「子供が心配する事じゃないよ」

ミドリ「そうよ。それに、お金は出すって言

ってるんでしょ？ なら、貰えるものは貰

っちゃいなさい」

ナギ「お母さん、そういう事じゃないでしょ」

ミドリ「じゃあ、どういう事なのよ？」

杏、言い争うナギとミドリを見て失笑。

杏「……ありがとう」

ナギ、家族を見て微笑む。

### ○坂下家・彩里の部屋

彩里、部屋に勢いよく入ってくる。

手には、クシヤクシヤになったプリン  
ト。

坂下の声「(大声)彩里! 話を聞きなさい!」

彩里、部屋のドアを勢いよく閉め、机に向かい、手に持ったクシャクシャのプリントを広げ、ペンを持つ。  
プリントは『最終進路調査』。  
彩里、プリントに書き始める。

#### ○潮彩高校・職員室

ナギ、自席で仕事をしている。

と、そこに林田が来る。

林田「西館先生」

ナギ「はい」

林田「2組の最終進路調査が集まりましたので、先生も目を通してください」

と、書類をナギに渡す。

ナギ「はい、わかりました」

林田が去り、ナギ、受け取った書類を見ながらめくっていく。

と、何枚目かで、手を止める。

書類は皺になっている彩里の進路調査。

第一志望の欄に『美術大学』と書かれている。

ナギ「説得できたのかしら」

と、不安げに書類を見つめる。

○同・美術室

キャンパスに向かってツバメの絵を、  
鬼気迫る顔で描いている彩里。

○潮彩町・全景（夜）

雪が降り積もる。除夜の鐘の音。

○シーサイド潮彩・ナギの部屋（朝）

ナギ、窓を開ける。

外は雪景色。

ナギ、上を見上げるとツバメの巣だけが残っている。

ナギ「来年も来るかな」

と、目の前の坂下家の閉められた窓を見る。

ナギ「……」

○西館家・外観

正月飾りが玄関に掛けられている。

○同・玄関・中

杏とミドリ、コートを着ている。

ナギ、見送っている。

ミドリ「夕方までには帰るから」

ナギ「杏、しっかり合格祈願してくるのよ！」

杏「うん！ 行ってきまーす！」

杏とミドリ、出て行く。

○同・リビング

ナギ、リビングに入ってくる。

西館、ソファアールでテレビを眺めている。

西館「母さんと杏ちゃんは？」

ナギ「行った……：：：：そういえば、ナミは？」

西館、寂しそうな顔をして首を振る。

西館「今年も向こうのご実家で過ごすそうだ。」

ま、元気にはやってるだろ」

ナギ「そう」

と、ソファ―に座り、テレビに目を向  
けている西館を見る。

ナギ「ねえ……お父さん」

西館「(テレビを見たまま)ん？」

ナギ「お父さんにとって、子供の幸せって何  
だと思う？」

西館「なんだ、急に」

ナギ「いや、ほら。私って結婚もしてないで  
しょ？ まあ、仕事はうまくいってるけど。

親としては、どう思ってるのかなって」

西館「……そうだな。まあ、できれば幸せな  
結婚はしてほしいけどな。孫の顔も見てみ

たい」

ナギ「……ごめん」

西館「けど、結婚しようがしまいが、ナギが  
幸せだと思ってる、元気に日々過ごしてさえ  
いれば、それでいいと思ってる」

と、ナギの方を見る。

西館「まあ、母さんはお前が将来一人きりになるのを心配してるけどな、お前が幸せならそれでいいんだよ。お、始まった」

と、テレビに戻る。

ナギ「……ありがとう」

と、西館を見て嬉しそうに微笑む。

○潮彩高校・3年2組・中

林田、生徒達の前で話している。

ナギ、教室の端で立って見ている。

林田「では、今週から大学受験や面接に行く人もいると思いますが、いつも通り、力を発揮してください。では、皆、頑張ってください！」

生徒「きりーっ」

生徒達が立ち上がる。

チャイムの音。

ナギ、彩里を見る。

彩里、表情がなく硬い顔。

ナギ、気になりじっと見る。

生徒「れい」

生徒全員「さようならー」

と、一同、解散し始める。

彩里、急いで鞆を持って出て行く。

ナギ、彩里を心配そうに見つめる。

○シーサイド潮彩・外観（夜）

チラチラと雪が降っている。

○同・ナギの部屋（夜）

時計は、8時過ぎ。

部屋着姿のナギ、プリントを見ている。

プリントには各大学の受験日程が書か

れている。

ナギ「明日なのか」

と、外から騒がしい声。

ナギ、顔を上げ、立ちあがって窓を開

ける。

坂下の声「（怒鳴り声）家に戻りなさい！」

彩里の声「嫌！ 私、行くんだから！」

ナギ、目を見開き窓から慌てて離れる。

○坂下家・外（夜）

家の前で、大きな鞆を持つ彩里の腕を  
掴み、家に連れ戻そうとしている坂下。

坂下「（怒鳴り声）言う事を聞かないか！」

彩里「いや！ 私、行くんだから！」

美穂、後ろで泣きそうな顔で見ている。

と、ナギ、慌ててやってくる。

ナギ「どうしたんですか！？」

美穂「ああ先生！ あの、彩ちゃんが急に受

験しに行くって言いだして」

ナギ「え？」

と、彩里を見る。

彩里、ナギに気が付き、気まづげに目  
をそらす。

ナギ、彩里を見て、坂下と彩里の間に  
入る。

ナギ「あの、お父さん！ 受験、受けさせて

あげる事はできませんか？」

坂下「今更、そんな事っ」

ナギ「彩里さんの気持ちを考えてください！」

坂下「この子は、結婚させると決めたんです！  
その方が幸せなんだ！ 絵なんて無駄なも  
の描いてる暇はないんです！」

ナギ「そんな事ッ」

彩里の声「（遮って叫び声）無駄なんかじゃな  
い！」

ナギ、坂下、美穂、彩里を見る。

彩里、涙目になっている。

彩里「私は絵を描きたいの！ 私の幸せ、お  
父さんが勝手に決めないでよ！」

坂下「…彩里」

と、シーサイド潮彩や近所の住人が騒  
ぎで集まり始める。

ナギ、周囲の様子に気が付いて

ナギ「彩里さん、今日はもう、駅も空港も閉  
まってるわ。今夜は、家に入りましょう、  
ね？」

彩里「…」

美穂「彩ちゃん、お家に入りましょう」

彩里「…」

坂下「……私は、認めないぞ」

美穂「お父さん！」

坂下「行く事は許さん！　もう、部屋から出

すんじゃないぞ！」

と、家の中へと入っていく。

彩里、坂下の背中を見つめる。

ナギ、彩里の手をつかむ。

彩里、ナギを見る。

ナギ、彩里を見て小さく頷く。

彩里、小さく頷き返し、力なく家へと

入っていく。

ナギ、家へ入る彩里をじつと見る。

美穂「先生」

ナギ、美穂を振り返る。

美穂「……私達は間違っているんでしょか」

ナギ「……」

美穂「私はただ、あの子に幸せになってほし

いんです」

ナギ「……それでいいと思います」

美穂「……」

ナギ「親はただ、子供の幸せを願って、見守ってあげればいいんだと思います」

美穂「……」

ナギ「ただ……彩里さんの幸せは、彩里さんしか、決められないんです」

ナギ、上を見上げる。

彩里の部屋の窓、明かりがつく。

○シーサイド潮彩・ナギの部屋（深夜）

真っ暗な部屋。ナギ、ベッドに寝ているが目を開けている。

目をぎゅつとつむって、勢い良く起き上がり、スマホを手取る。

○坂下家・彩里の部屋（深夜）

卓上電気の明かりの中で彩里、机に突っ伏している。

と、側に置いてあるスマホに着信。

彩里、スマホを手に取り、画面を開く。

驚きで目を見開く彩里の目。

スマホ画面には、『朝、車で待っています。  
西館ナギ』のメッセージ。

○潮彩町・全景（早朝）

雪が積もり朝日に照らされている。

○駐車場・ナギの車・中（早朝）

ナギ、エンジンを掛けたまま、運転席  
からじっと坂下家を見ている。  
車の時計は6時5分。

○坂下家・彩里の部屋・中（朝）

彩里、靴を持ちコートを羽織る。

○同・彩里の部屋・外（早朝）

彩里、扉を開き廊下の様子を伺う。  
静まり返った廊下。  
彩里、静かに廊下に出てくる。

○同・階段と玄関・中（早朝）

彩里、静かに階段を降りて来る。

そのまま、玄関へと小走りで行き、急いでブーツを履く。

美穂の声「彩ちゃん」

彩里、はっと手を止めて振り向く。

居間の扉が開き、美穂がいる。

彩里「お母さん……あの、私」

美穂、近づいてきてそっと弁当を差し出す。

彩里、驚いて美穂を見る。

美穂、彩里の顔を見て微笑み。

美穂「お父さんはもう工場に行ってるから。

今のうちに行きなさい。気を付けてね」

と、彩里の手をぎゅっと握る。

彩里、泣きそうな顔で頷いて、立ち上がり玄関を出て行く。

美穂、扉が閉まる玄関を見つめる。

美穂「頑張って」

○ 駐車場・ナギの車・中（早朝）

ナギ、運転席で坂下家の方を見ている。  
と、坂下家から、彩里が出てくる。

ナギ、急いで車を動かし、彩里の側に  
車を寄せる。

彩里、ナギの車の助手席に乗り込む。

彩里「先生！」

ナギ「試験は何時？」

彩里「えっと、13時からです」

時計は、6時30分。

ナギ「ギリギリかな」

と、アクセルを踏もうとする。

車の前方、工場から坂下が出て来る。

息を飲むナギと彩里。

坂下、車に気が付き目を見開く。

ナギ「シートベルト！」

彩里「えっ、あ、はい！」

ナギ、アクセルを踏んで、車を発進。

坂下の横を勢いよく、車が通り過ぎる。

彩里、後ろを振り返り、坂下を見る。

彩里「お父さん、ごめんなさい」

坂下、呆然と車を見ている。

○坂下水産加工工場・外（朝）

坂下、走り去る車を見つめ、我に戻る。

坂下「彩里！」

と、側に停めてあった軽トラックに乗りこみ、エンジンをかける。

美穂、家から出てくる。

美穂「お父さん！」

坂下、トラックを発進させようとする。

と、目の前に、美穂が出てくる。

坂下「どきなさい！」

美穂「お父さん！」

坂下「お前、なんで行かせた！」

美穂「（泣きそうな声）お父さん！」

坂下「お前は！ 全部台無しにする気か！」

美穂「もう、やめましょう！」

坂下「何言ってるんだ！」

美穂「あの子の幸せは、私達が決めちゃだめなのよ！ 私達のせいで台無しにしちゃだ

メなのよ！」

坂下「……」

美穂「お父さん」

坂下、ハンドルから力なく手を離す。

○道路（朝）

ナギの車が走っていく。

○走るナギの車・中（朝）

彩里、泣きそうな顔で鞆を胸に抱く。

ナギ、前を見て運転しながら

ナギ「帰ってきたら」

彩里、顔を上げナギの方を見る。

ナギ「無事に受験終わって帰ってきたら、お

父さんに一緒に私も謝るから。だから、安

心して精一杯やってこい！」

彩里「……」

と、力強く頷く。

ナギ、嬉しそうに微笑む。

○ 空港・外観（朝）

雪に覆われた空港。

ナギの車が勢いよく入ってくる。

○ 同・正面入口（朝）

ナギの車、正面入口前に入って停まる。

彩里、車から降りる。

ナギ「あとは大丈夫？」

彩里「はい！」

と、入り口に入ろうとして振り返る。

彩里「ナギ先生！」

ナギ、彩里を見る。

彩里「私、絶対、画家になって、個展開くから！  
鳥の絵の個展！」

ナギ「！」

彩里「その時は、先生の写真も飾るからね！」

ナギ「……」

彩里「ありがとうございます！  
行ってきます！」

と、深くお辞儀をして走って空港へと

入っていく。

ナギ、啞然とするも苦笑を浮かべる。

ナギ「画家の前に、大学合格でしようが。(大

きく息をつき) ああ……怒られるなこれ」

と、微笑みを浮かべる。

と、空をツバメの様なものが飛んでく。

ナギ「えっ？」

と、空を見上げる。

ナギ「……気のせいか」

空に、飛行機が飛んでいる。

### ○潮彩町・全景

T…数年後

### ○アトリエ「IRODORI」・外観

水島のアトリエと同じ場所。

入口に『アトリエIRODORI』の  
看板。

横に張られたポスターには『AIRI  
特別合同個展「鳥」』の文字。

○同・中

様々な鳥の絵と写真が飾られている。

一番奥、1枚の大きな同じ大きさの絵画と写真の前に立つ女性の後姿。

女性は、西館ナギ（43）。手には、古い一眼レフカメラ。

彩里の声「ナギ先生」

ナギ、後ろを振り返る。

後ろから、坂下彩里（29）が来る。

ナギ「彩里さん」

彩里「お久しぶりです」

ナギ「個展開催、おめでとう」

彩里「ありがとうございます」

ユメの声「ママ！」

ナギと彩里、声の方を振り向く。

声の先に、坂下ユメ（5）と男性の姿。

ナギ「娘さん、そっくりね。お父さん、喜んでんじゃない？」

彩里、苦笑して頷く。

彩里「結局、家も旦那が継いでくれて。あの

時の騒動は一体なんだったのかって感じで  
す」

ナギ「なんだかんだ、最後はうまい事収まる  
ものね」

彩里「あの時は、本当にお世話になりました」  
ナギ「約束、守ってくれたからいいわよ」

と、絵と写真に目を向ける。

ナギ「良い絵ね」

彩里「先生の写真も。そういえば、また、あ  
の場所にツバメが戻って来てましたよ」

ナギ「本当？　じゃあ、見に行かないと」

と、再び絵と写真に目を向ける。

彩里、同じように絵を見つめる。

壁に飾られた絵と写真はどちらも、ツ  
バメと女性の姿。

絵と写真の間にあるタイトルプレート  
には『ツバメと私』とある。

終